

# 車を走らせ足でかせいで 白川の全体像を探る!!

幼い日、「山の向こうは何があるだろう」「海の向こうにはどんな国があるだろう」などと考えたことが、誰でも一度や二度はあるでしょう。

同じように、身近にある川も「この川は、いったいどこから流れて、どこへ注いでいるだろう」と不思議がる子供もいるでしょう。

「なぜだろう」「なんだろう」などの疑問こそが、学習の出発点と考えます。調べたり、体験したりして、疑問が解決した時の感動が、次の学習を進めていく原動力にもなると思います。「探検ごっこ」の楽しさが学習に生かされないものでしょうか。「足元からの行動」は環境学習の基本とされていますが、足元の川をさかのぼり、くだっているような発見をしてみたらと思います。

白川流域図



# 白川わくわくランド ニュース

## 発行

白川流域住民交流センター  
 利活用懇談会  
 白川流域住民交流センター  
 (白川わくわくランド)  
 〒860-0854  
 熊本市東子飼町8-55  
 TEL・FAX(096)346-5454  
 ホームページアドレス  
<http://s6.kcn-tv.ne.jp/users/wakuwaku>  
 メールアドレス  
[wakuwaku@s6.kcn-tv.ne.jp](mailto:wakuwaku@s6.kcn-tv.ne.jp)



## 白川の橋(1)小島橋

白川河口から1番目の橋。河口域のため川幅が広く、橋の長さも約270mと長い。以前、ここは右岸側に大きく迂回していたが、昭和28年の大水害で大きな被害を出した。河川工事で、河道はまっすぐになった。元の川跡は、現在公園化されているが、昔をしのぶ、石ばねや石垣、石段、榎等の大木、恵比寿の石像など見ることができる。



橋の上流右岸から見る



もとの白川沿に残る船つき場の石段。近くに白川番所跡の標柱などがある。

## 白川の特徴

水源は根子岳で南郷谷を流下。阿蘇谷を流れる黒川と立野で合流、河岸段丘を形成する中流地域を経て、熊本市街部を貫流し有明海に注ぐ。

流域面積四八〇平方キロメートル、長さ七四キロメートル。

流域面積の約8割が阿蘇のカルデラからなり、阿蘇に降った雨の影響を受けやすい。

流域はオタマジヤクシの形。(上の流域図参照)

立野より下流ではほとんど支流を持たない。

阿蘇の火山灰(ヨナ)を含んでいる。昭和二八年の大水害の時も水の害もさることながら泥害が被害者を悩ました。

流域には、一〇の市町村。

(白水村・長陽村・久木野村・西原村・菊陽町・大津町・高森町・一の宮町・阿蘇町・熊本市)

熊本市街は天井川になっている。

# 加藤清正なぞ解きバスツアー 春の白川・緑川・浜戸川へ

16世紀後半から17世紀にかけて、加藤清正が白川・緑川などに創意工夫をこらした治水・利水事業を精力的に行ったことは、広く知られています。

その事業は、手を加えられ、また、形を変え現代の河川事業に生きております。今回は、「川に逆らわず、川を治めた」清正の事業の一端を観て回りました。

## 浜戸川 たんたんおとし (城南町 島田)

越水可能な石造乗越堤。洪水になると、ここから水は遊水地に流れ込んで堤防を守った。



## 緑川 桑鶴轡塘(くわづるくつわども) (城南町)

熊本市・松橋をつなぐ緑川に架かる蒼町橋(めどまちばし)をはさんで、上・下流にある。県内でも最大級の遊水域を持つ。

(城南町教育委員会 案内板)



## 白川 鼻繰り井手 (菊陽町)

清正によって造られたかんがい用の井手。馬場楠堰から取水し、現在もその機能を果たし、約180haの田畑を潤している。



## 緑川 鵜の瀬堰(うのせえん) (甲佐町 上豊内)

加藤清正は、鵜が斜めに並んで泳ぐ夢を見たことからヒントを得て、ここに斜めの堰を造ったと言われている。



## 図書紹介

・総合的学習への兆銭20川のプロジェクト総合学習実践例として大津南小学校の総合「しらかわ」が載っています。

そのほか

・総合百科事典ポプラディア 全12巻  
子供たちの調べ、学習に役立ちます

・楽しく学ぶ川の学校 ①～⑩

⑨では、「白川でつながる友達の輪」ということで、長陽小学校・大津南小学校・飽田東小学校の実践例が紹介されています。

- ・だれでもできるやさしい水のしらべかた
- ・だれでもできるバックテストで環境しらべ
- ・まさかの時の危機管理～シリーズ水害～(ビデオ12巻) など

## 第三期わくわく塾 第1回

講師 小林 一郎 熊本大学工学部教授

題 白川が最も美しく見える場所を探しましょう

「自分の手足の活動も含め五感を使って、白川が最も美しく見える場所をカメラにおさめる。その一番好きな写真について、場所や時間に関する意味を読み解き話し合いをする。このように「特異点探索」を行うことで、個人の感覚から得られた評価の価値は、対話を通して全体の意見(知識)となる。」という学習方法の提案であった。

総合的な学習の一環として、前述のようなフィールドワークを通し、自分が生活する地域そのものを学習の場とすることで、実践的な知識の習得を図ろうというものであった。

特異点探索とは、教授が提案される橋梁を評価するためのフィールドワークの方法である。

実践例として、矢部の子供たちに行った通潤橋の特異点探索を紹介された。

## 第二期わくわく塾 第3回

講師 宮本 健也 国土交通省 熊本工事事務所 課長

題 これからの川づくり

白川の川づくりについて、専門の立場から話があった。

近代河川制度(明治29年)の誕生以来、河川法改正の歴史をふまえながら、白川の河川整備計画が語られた。

熊本市街地の洪水対策と共に、水と親しめるやすらぎの都市空間づくりが具体化されつつある。

特に大甲橋と明午橋間の河川整備については、治水・環境の立場から、多方面からの意見を集約しながらベストな方法が模索されていた。

また、講師が少年時代を過ごされた岐阜周辺を流れる長良川・揖斐川・木曾川にまつわる「宝暦治水」についての話は、いつの世も必死で川と向かい合う人々の姿がしのばれた。現在の白川もそうである



連休の最終日、五月六日の早朝から子飼橋付近のゴミ拾いをする高校生の姿がありました。高校生は、学園大付属高等学校の二、三年生。左岸側の公園を運動会の練習で使っているのもそのお礼にゴミ拾いのボランティアといことでした。

「男子と交代で子飼橋付近を清掃をしています。花火や煙草の吸殻など何回拾ってもまた捨ててあります。でも、拾わないと増えるばかりですから。」と。

この日は、数日前の増水で上流から多種類のゴミが流れ着いていました。悪臭を放つものもある中での作業でした。

世の中は、大型連休と騒いでいる時、汗を流している高校生の姿は、きびきびとしてみてもさわやか。一緒に掃除したわくわくランドの職員も気持ちいい一日のスタートができました。

その後も、白川沿いの「ゴミ拾い」が続けてくれています。

さわやか高校生